

6/26

●ヒアリング①

石巻復興支援協議会にて（伊藤会長、小林氏）

◆炊き出しはGWがピークで1.5万食～2万食。現在は、3000食程度。

◆仮設住宅への入居は沿岸部の集落を除き、完全な抽選で入居が行われおり、仮設住宅内でいかにコミュニティを再構築するかが大きな課題。コミュニティ作りにおいては地元住民でも地元行政でもない第三者の果たせる役割が大きいが、そのためにはそのコミュニティへの継続的なコミットが必要な為、その部分をボランティアで担うのは非常に難しい（本当は行政からの委託者がよいと思う）。

◆継続的な支援活動（事業展開）が求められている。

●ヒアリング②

湊中学校避難所にて（四万十塾代表 木村氏）

◆状況は変化している。現在は被災者の自立支援の時期。炊き出しは地元の方々やる比重を増している。

◆非常に先を考えて行動されている印象を受けた。よく組織された団体で継続的な支援を行なっている。

6/27

■女川町で5ヶ所の仮設住宅を調査

仮設住宅毎に建家が違い格差がある。また、避難所や一般住宅に隣接した所もあり、住民感情が心配である。商店などは近くに無いため、買い出しなどの対策は必要。集落ごと転居できるところは問題なくコミュニティを形成できると思うが、市街地住民の方が移られる仮設住宅では抽選による入居のため様々な問題が発生すると思われる。どの仮設住宅にも集会所や談話室が設置されているが、それらを活用した新しいコミュニティ作りをどこが担うのか女川町においてはまだ見えていない。特に200戸を超えるような大型仮設住宅では管理組織の構築に専門家のサポートが必要のように感じられた。石巻に比べて閉鎖的な所のある女川町においては、外部のスキルを持った人々の力を借りるための合意形成から取り組む必要があり、その実現には困難が予想される。

■仮設住宅入居者へのFAX設置援助

表向きには非常に前向きに生活再建に取り組まれていたご夫婦だった。ただ、今後町の復興がどのように進んでいくのかということについては、大きな不安を抱えているようだった。女川町の他の方にも言えることだが、何と自分たち(と町)の力で復興しようという意識が強い。このよう な方々に対しては行政が早く復興ビジョンを示していく必要があるが、この部分については民間のボランティア組織にできることは少ない。

■石巻復興支援協議会分科会に参加

◆石巻の自衛隊の炊き出しが終了。避難所で自炊できるようにしていく。炊き出しは、自立の妨げになる。

◆ハエが大発生している。ハエ取りのノウハウも共有され駆除を進めているが、追い付かない状態。

6/28

●ヒアリング⑤

石巻商業高校にて（上総教頭、小山先生、他3名の先生）

◆石商に校舎の全壊した石巻女子高校3年生を受け入れるため、5月15日に避難されている方全員が他の避難所に移った。市が急に決めたため、非常に戸惑ったとの事。

◆内定取り消しとなった昨年度の卒業生は県と情報をやり取り受け入れ先を探しているが宮城県内には雇用が無い。県外（特に遠方）の雇用は相当あるが、県内から出たからない。被災した、家族、地域を残して遠方に行くのに抵抗があるのかもしれない。

◆現3年生に対しては、現実問題として県内に求人が無いことを理解させ、県外に出て地元を助けるなり、数年後に帰ってきて復興を進めるなど、指導している為か県外希望の比率が高くなっているとの事。沿岸部企業が壊滅的な状況なので早期に県内の雇用の創出が望まれる。

◆生徒たちは被災しているにも関わらず、皆元気に登校している。それが学校としては一番の救い。

◆校舎のすぐ近くが仮瓦礫置き場となっている。仮置き場だが今後どこに移動させるのが決まっていない。非常に高く積み上げられており異臭もある。しかし最大の問題は、メディアが必要以上に騒ぎ立てている事。取材はひっきりなしに来るとの事。被災直後の食料の報道でメディアの怖さを教わっている為、今後の報道を恐れている。

◆皆様から初期の炊き出しについて、非常に感謝されました。

◆被災地支援活動とは関係ないが、瓦礫置き場の問題はこのエリアだけでなく多くの場所で問題になってくると思われる。高校や仮設住宅の側、という「おいしい絵がら」のみが先行し、そこに通う学生や暮らす人々の気持ちはおどろきにされがちである。

ヒアリング③

（福）女川町社会福祉協議会にて（武石氏）

◆仮設住宅への入居が始まり、避難所は統廃合が進み避難所数、避難者数が減少。現在の避難者数1156人。

◆衣食住は完全では無いが満たされつつある。

◆ボランティアの数はもうそんなに必要はない模様。自立心が強い影響もある。

◆漁村部は集落毎に仮設住宅が建設されているが、市街地は抽選のため仮設住宅にバラバラに入居となるため、コミュニティの再構築が必要となる。そのきっかけ作りにボランティアに協力してほしい。これには継続した活動が必要。

◆石巻同様、女川でも課題となっている仮設住宅におけるコミュニティ作りには様々なきっかけがあるだろうが、外部の協力と共に仮設住宅内でキーマンとなる地元の人がいるかどうかが一番重要な問題と思う。

◆仮設住宅の立地が悪く買い出しなどが困難。コンテナでの仮設店舗や移動スーパーが始まる予定。

■総合体育館避難所でマッサージのボランティア活動を行った白砂氏の感想

「マッサージの際に皆さんとお話しをし、体より心の疲れが大きいと感じた。自身の将来(遠い将来も近い将来も)の不安が大きいようです。」

●ヒアリング④（福）石巻市社会福祉協議会にて（阿部氏）

◆NPO SSERには最初の混乱期に助けてもらい非常に助かった。湊小のカレーは非常に印象的だった。

◆今までは想定範囲。これからは本来の業務であり難しい。

◆ボランティアの調整はスキルのあるボランティアの人達に任せ、パイ役や黒子に徹した事が良かった。全て社協で背負い込むととてもまかないきれない。また、不均衡が発生してもボランティアなら大きな問題にならなかったのが良かった。助けられる人が助けられるだけの人を助ける事が大切だと思っていた。また、調整会議が上手く機能した結果、ボランティアセンターの乱立を防止できた。

◆個人ボランティアにお礼の手紙を送る予定。石巻に帰ってきてもらい観光収入に繋がればと考えている。

◆今後の大きな課題は中小企業支援。再建の気力を出してもらい雇用の創出ができるよう、どのような支援していくかが問題。

◆再建プログラムは5年スパンで考えている。

■ここでもやはり今が支援の過渡期という話が聞かれた

仮設住宅や民間賃貸等への自主避難も含めて市内全域の状況を把握するの必要を感じているようだ。その事業については行政と社会福祉協議会が組織的に行うようであり、外部のボランティアが担うべき仕事ではないと思われる。緊急支援が一段落した時に外部ボランティアに求められるのは、地元の人々や団体との連携による継続的で緩やかな支援の仕組みだが、現状の復興支援協議会は外部ボランティアが中心に動いており、これからいかに地元との協働関係を構築していくかが課題だと感じた。今後も短期的な支援（住民の意識高揚を図るイベントなど）もある程度は求められているようである。その際は、一方的に提供するような内容ではなく、地域の方々と一緒に作っていくような形式のイベントが良いのではないと思う。

●ヒアリング⑥

（福）女川町社会福祉協議会にて（阿部会長）

◆大変な時期に炊き出しをしたことに対し謝辞を頂いた。又、撤収時、引き継ぎをしたことについてもお礼を頂いた。

◆女川原発内の避難所は避難者数が減少していき、最終的に自主的に集会所に移動し閉鎖となった。

◆女川町は女川町にあった方法で災害ボランティアの受け入れをされている。地域コミュニティのつながりの強い地域では石巻とは別の方法が必要なのであろう。社会福祉協議会は別にしても、町や住民としてはボランティアが深く地域に入り込むことを望んでいないように感じた。

■仮設住宅に支援物資配布

危惧されていたように、隣がどのような方かわからない世帯が多く、コミュニティの形成は必要不可欠であると感じた。同じ女川町内でも地域により状況は全く異なる。街中から離れるほど外部の人々への警戒心はつよいものの、地域内の繋がりが強い。これが石巻市内になるともつと差があると思われ、一口に仮設住宅のコミュニティ形成と言っても、地域によってその対処法をひとつひとつ変えていく必要がある。（地域コミュニティとは元来そういうものであると思うが）

東日本大震災緊急支援活動 2011年3月17日～4月13日

3月18日～4月11日
現地滞在25日間

3月17日 出発

3月18日 宮城県仙台市へ物資輸送。宮城県庁より石巻市への支援要請。石巻市災害対策本部より、石巻商業高校内避難所での炊き出し要請。石巻商業高校に炊き出しテント設置。

3月19日 石巻商業高校にて炊き出し開始。女川地区での調査開始。以降、石巻市内・女川町で石巻市社会福祉協議会・石巻災害復興支援協議会、女川町社会福祉協議会、愛媛県社会福祉協議会と協議・調整し、炊き出し、ニーズ調査、物資輸送を実施。炊き出しは、合計約3万食を提供。

4月11日 撤収

4月13日 帰着

活動報告及び意見交換会

2011年4月2日 於：琵琶湖リゾートクラブ会議室



「東北関東大震災の支援活動に関する中間報告と、今後の活動方針」同時開催チャリティオークションの売上上げ173,200円全額を義援金に算入、支援部隊の食材や資材費に充当。

支援活動後の現地調査

2011年6月25日～6月29日

目的：緊急支援活動の成果の確認および今後の支援活動についての情報収集とヒアリング

人員：白川 淳事務局長、厚主 和雅理事、白砂 久司（ボランティア）

対象：女川ボランティアセンター（女川社会福祉協議会）、石巻社会福祉協議会、石巻災害復興支援協議会、石巻商業高校、四万十塾、仮設住宅の方々からヒアリング。各避難所にてマッサージ施術。

